最新式
洋服調進
八
松江市京店
八木半彌

食料
鑵詰
製造
博覽會共進會
褒賞受領
松江市殿町
遊水亭高橋商店

和洋酒類
兼業醬油醸造
二
松江市末次本町
西代恒市

活版
銅版
印刷業
簿記帳製本
松江市殿町
報光社

綟子製シャツ

一名（アセ取り）

本品は肌當り柔かにして高尚地質丈夫にして夏期最も適當の良品也

發賣元

松江市白潟本町

土谷連之助

中附四

雲山碧水

編者、素、烟霞の癖あり。所職に縛せられて、足多く鄙曲の外に出でずといへども、名勝舊跡遍く探りて、悉く窮むるに庶幾し。嘗て大山の絶巓なきはめて、熔岩の流を下り、復、双脚を驅つて三瓶山頭に嘯き、一昨々年の夏、美保關より島根半島の北岸を徒渉し、同年仲秋、清水寺に遊び、晩秋鰐山にわけ入りて、紅葉飽霜の間に鹿鳴の呦々を聽き、一昨年の夏、廣瀬に入りて月山の古城址に英雄の末路を弔ひ、船通山の白雲を踏破して、素尊の宏圖を追懷し、舌震の絶勝を探りて、危巖乱立の奇趣に驚き、昨夏また八百丹杵築の古都を尋ねうて、天日隅宮を拜し、日御埼の社に詣で、立久恵の奇勝をきはめ、晩秋、ふたたび月山に遊び、今春、竹島視察員の一行に加はりて、寒潮百里、絶海の孤岩に露經翠滅のあとを追想し、歸來草稿を整理して、本書を編成せり。以下數篇は、その折々になれる紀行、日記の一部にして、ここに附載するは、聊雅朋の情に堪へざるものあればなり。

明治三十九年六月

碧雲生

目次

島根半島の北岸……一
船通山……十一
鬼の舌震……十四
鰐山の二日……十八
上代の神都……二十二
月山の古城址……二十五
竹島日記……三十一

島根半嶋の北岸

白沙青松の盆景、美は則ち美なりといへども、狂瀾雪を噴き、怪巖天を摩する日本海沿岸の、蹕厲豪宕の奇觀、人意を壯にするに若かざるなり。ことに島根半島の北岸、怪巖靈洞に至つては、また、その危觀を極めたるものにして、他に多く、その匹儔を見ざるべし。僅々四日間の行脚旅行、敢て半島沿岸の奇勝をつくせりといはず、ただ、その一斑を紹介するのみ。

○美保關　島根半島將につきんとして、一小灣を抱く處、これを美保關とす。後は蜿蜒たる丘陵を負ひ、前は海灣を隔てて、出雲不二に對し、地域狹隘、三百の人家、灣頭に櫛比して、國幣中社美保神社の威德と、碇泊とによりて生計を立つ。美保神社は、事代主命、及びその妃、美保津姫命を祀れる處。石の鳥居をくゞいれば、神鳩翩々として、庭上に下り、殿廊に翔り、双廟屹として千木高知り、神樂の響、劉喨として、覺えず莊嚴の感にうたれぬ。

○灣頭の夕暮　一浴を了へて、欄に倚れば、水夫は裸體のまゝ、海中に投じて水浴をなし、小兒は岸邊に泳ぎ、女兒もまた尺布を腰間にまとひ、小桶を携へて、游泳の練習に餘念なし。出雲不二は、夕映の名殘の色を、嶺頭にとゞめて、熔岩の流あざやかに、やがて、暮色窈然として夜の幕に入らんとす。水に臨める樓臺には、輕袗の人、半裸體の人、欄に倚りて涼を取り、蜩の聲後山に喧然たるとともに、港内は、一面に淡墨の刷毛もて塗抹したらんが如く、薄く蒼靄の裡に入る。

○灣頭の夜景　夕暮の喧囂は闇に消えて、松黑く、山黑く、水黑く、碇泊の船燈は漁火の如く、星光の如く、暗中に輝けるのみ、海風徐に面を掠めて、岸うつ浪の聲靜なり。やがて、兩岸の水樓、絃歌の聲湧き。

闌の五本松一本伐りや四本、あとは伐られぬ女夫松

闌はよい處朝日をうけて大山おろしがろよろよと。

雲人、獨得の濁調幾多船客の腸を斷たしむ。

大山お山から隱岐の島見れば島が四島に大滿寺。

（大滿寺山は、隱岐の最高峯なり）

織手三絃をあやつりて、海濤千里を踏破せる剛の者を籠弄する妓女の手腕、また侮るべからざるものあり。かくて、明月、東岬の上に出づれば、金波漾々、銀蛇を躍らし、碇泊の船舶、岸頭の人家、さながら繪の如し。

水の棚月にあや織る浪のうね夜は更けにけり三保の入海。

墨繪なす磯山松のいただきに月は昇れり夜はふけにけり。

うねうねと銀蛇もこよふ、浪の上をかすかに渡る追分の節。

やがて、愛を割きて、寢に就けば、明月枕頭を窺ひ、海風蚊帳を搖がして、黑甜鄉裏夢正に涼し。

○灣頭の朝景　汽笛の聲に驚かされて、頭を上ぐれば、朝暾海面を染め、松樹を色どり、大山は夜の帳をかかげて、屏顏をあらはし、夜見ケ濱の長洲、うの右をかざり、汽船は煙烟を漲らして出航の準備をなし、蟬聲後山に響きて、今日の炎熱を豫報し、軋々たる櫓聲に和して、默乃勇ましく漕ぎ歸る漁夫、朝繩歸れりと、籠を携へいづる婦女、溪洞たる鮮

魚を投げ出す壯夫、生氣溢るる灣頭の朝景色、愉絶快絶。

○雲津の赤壁　月明かに、星稀に、烏鵲南に飛ぶ、と詠じけん、江畔の赤壁は知らざれど北海萬古の浪に彫刻せられたる出雲赤壁、また、絶勝たるを失はず。美保關を發し、望樓行の電信柱に沿ひ、崎嶇たる峻坂を陟降して行くこと十數町、才の浦に達す。佐井は美保關の背面に位し、漁家僅に數戸あるのみ。舟を備ひて雲津浦に渡る。一里の海上、涼風袂を拂ひ、漣波船腹を打ちて、壯快いふべからず。海岸は、斷崖峭立、屏風を立て列ねたるが如く、海上には、危巖怪礁、峙立して、青松ろの上に點じ、風光の清絶なる多くろの比を見ず。黑島の巨礁を右に見て、青島に至る對岸は、絶壁數十丈、皺裂奇古、松樹ろの間に點綴して、中央に洞窟あり、深さ數十丈、一船をうの中に容るべし。岩窟は幾千年の潮に洗はれて紫色を帶び、螺類簇生せり、いよいよ深く入れば、凄風颯然として襲ひ來り、皮膚粟立し、久しく居るべからず。

○島根半島の二大絶勝　船をかへして、雲津に向へば、灣口の巨巖、峭壁のたゞずまひ、穴觀音の洞窟、巖上の松樹、ろの好景、赤壁に勝る。かの鎌倉大磯、さては、須磨舞子の海濱の如き、たとへば、都少女の淡粧を疑らして人の憐みを引くが如し、恬淡はあり、溫雅はあり、優麗はあらんも、斷崖峭立、怪巖骨ゝあらはして、長風萬里、巨濤巖を嚙んで、玉と碎け雪と飛ぶ、さながら、大丈夫が陣頭に立ちて、千軍萬馬を叱咤するが如き日本海々岸の特色たる跌宕豪壯の大觀に至りては、太平洋沿岸に見る能はざる處。惜いかな、この絶大の偉景も交通の不便なるより松江人士すら、知るもの少し。旅行家久保天隨氏はろの著、山水美論中に叙述して曰く、

山陰の海岸、ろの風色の殊絶なりしは、出雲にあり。島根半島の北方、海汀八里、加賀より美保國に至るの間、懸崖絶壁、州渚斷續、屈曲出入、ことに甚しく、譬ふれば、蟲ばみたる紙の如く、なれる處、即ちこれ、ろの地、深く深く入りて、灣をなせる處、必ず。數十戸の小村あり。漁業を主として生活す。人民質朴、太古の風あり。出雲風土記を按ずるに、鴻荒の世、諸神の分居せし地なりとか。

と、實にや、千古の波濤に洗はれて、不撓不屈の偉丈夫が、赤裸々の絶景中、余は、雲津灣頭と七類灣口とを以て、島根半島の北面にれける二大絶勝と呼ばんとす。

○七類灣口の絶景　雲津に上陸して、西、諸喰浦に向ふ。この坂路は、野波より加賀浦に越ゆる瓜坂につぎて、北岸第二の峻坂なり。一道の烏徑、山裾を縫ひ、山腰をめぐりて、蜿蜒屈曲して、荊棘の裡に消え去る。一歩一喘、漸くにして絶巓に登りて涼を納れ、峻坂を下れば諸喰浦なり。再び額を衝く峻坂をよぢ上り、保田に下る途上、はるかに七類灣口を望む。一島ろの前に横はり、岩上の松、岩に激する白浪、白帆の遠く浮べるさま、實に一幅の活畫なり。七類灣は、深く陸地に侵入し、灣内廣闊にして水深く、船舶の碇泊に適す。ことに、南方の一山を貫通して、直徑四町の隧道をつくれば、山陰第一の商港たる境港の前面に達すべし、かくて同港の商權を七類におさむるは易々たるのみ。

○一浦一坂　島根半島の北岸(東部)はすべて道路といふべき道路なく、加ふるに、一浦より一浦に出づるには、險峻なる坂路をてえざるべからず。七類より片江をすぎ、菅浦の海濱に出で、稻積を經て、北浦に至れば、夕陽全く沈みて、海上一條の紅色を殘すのみ。

○海上の漁火　千酌浦にいたれば、日は全く暮れて、野波浦宿りの豫定は、到底達せらるべくもあらず。因つて知友某氏の厚意により、案内者一人を得て、夜を冒して千酌を出發す。はるかに海面を見わたせば、數千の漁火、波上に連りて、壯觀いふばかりなし。毎年夏期に至れば、東は地蔵鼻より、西は日の御崎に至る海上十數里、毎夜幾萬の漁火を以て飾らるといふ。案内者に促されて歩を轉ずれば、坂路險惡、恰も河底の如く、石出で土はれて、歩を運び難し。案内者の言によれば、前年の水害以來、未だ修理せざればなりと。漸く上るに從ひ、崎嶇たる坂路は、ハよいよ、險惡となり、石骨稜々として、仰げば巨岩前にあたり、怪巖後に峙ち、廿日の月日蒼く嶺頭にあらはれて、草奔途を埋め、蟲聲唧々として、泣くが如く、訴ふるが如く、萬象寂寞として、凄氣人に迫る。既にして、絶巓に達す。ことは、千酌、野波の村界にして、老松數株天風に吼えて、人の懷を清からしめむ、てこを下れば即ち野波の漁村なり。

○瀬崎灣頭　野波村の北端は即ち多古鼻にして、海上に斗出すること一里、ろの根本を瀬崎といふ。戸數僅に八十を有する小漁村なり。傳へいふ、元弘の昔、後醍醐天皇、隱岐より逃れて、この地に着き給ひし時、御船をつなぎたる綱掛の松は、同地殿浦の海岸にありといふ。千ケ島ろの前にあたり、エサキ島、ハデ島の岩礁高く峙ち、左には松島屹立して、

翠影掬すべし。

○七つ穴の奇勝　野波の七つ穴を見ざるのは、未だ此海の奇勝を語るに足らずと聞く。今や、船は奇巖怪礁の間を縫ひつつ、七つ穴に向ふ。孤帆輕風を孕みて徐々水を切つてゆけば、船夫は木製火の用心の烟草入をとり出し、長管を口に、五十燭の禿頭を炎日に晒して、海上生活の快を說く。瀨崎より沖宿に至る海岸、懸崖絕壁れはく、光琳風の松樹、ろの間に點綴して、屛風を列ねたるが如く、下側は、北海萬壑の波濤に侵蝕せられて、處々に洞門を開き、奇岩怪礁ろの下に碁布して、松影水にたち、蒼翠掬すべし。洞門の大なるもの十餘、七つ穴はろの尤なるものをいへるならん。洞門高さ數丈、窟內相通じて、自由に船を入るべく、漸く入るに從ひ、漸く廣闊となり、內部は、一帶の砂濱をなす。廣さ數百間、高さ數丈、數百人を容るるに足り、凄氣肌を刺して全身粟を生ず。洞內うす暗き處、鐘乳石の痕跡をとゞめ、天然の奇工波濤の彫鏤實におゞろくに堪へたり。

○多古海角の絕景　洞門を出づれば、沖宿の漁村は、巖下にあり。ここは、多古鼻の北端にして、タナゴ島の翠松、鶴島の岩礁、ろの前面に屹立し、海面鏡の如く、碧潭拭ふに似

たり。北方水天杳渺の際、かすかに青黛を描けるは、隱岐島にして、海上僅に十八里にすぎずといふ。

沖宿ここゞ出雲の北のはて隱岐しま低く雲たち迷ふ。

このあたり、海波常に荒く、ことに、嚴冬の候には、万重の銀濤、奔馬の如く來り逼り、巖怒り濤激し、玉山崩れ、雪峯碎けて、天柱折れ、地維缺け、海若怒號し、雷霆鳴動して、觸るる處、震撼せざるなし。ろの壯觀凡筆のよく狀する所にあらずといふ。海角を廻れば、加賀の神埼は、かすかに、西方に隱見し、モボシ網をおろせるも　反射鏡をうかべて海螺をあさるもの、三々五々夫妻同舟なるあり、少女の櫓をあやつれるあり、眞に寫生帖の好材料なり。

編笠に竹籠たづさへ海松とると瀨崎少女が裝ををしも。

あひの風靜にふきて眞帆かた帆白鷗のごとく海わたりゆく。

浪の上に反射鏡うかべて海人の子が千尋の底の幸あさる見ゆ。

雄々しくも櫓をあやつれる少女子にますらをわれの腕鳴らずやは。

○潜戸の神窟　眠るが如き夏の日本海、あひの風（東北風）波おだやかに、帆をあげて走れば、船ははや神崎につきぬ。岬頭つくる處、懸崖百尺、海濤巖壁を貫穿して、一大洞門をひらく。これを新潜戸の神窟とす。出雲の沿岸、怪巖、靈洞に富む。しかも、吾人は、七つと新潜戸とを以て、二大洞窟と呼ばんとす。前者は、廣闊を以て勝り、後者は、崇高を以て勝る。洞門狹隘にして、僅に小舟を容るべく、漸く入れば漸く廣闊となり、仰げば、岩洞高さ十丈、浪の浮鐫、浸水の鑿の跡、さながら、西の國にありてふ、地下に埋沒せる古美術館に入りたらんが如く、下は藍黑の深潭、直ちに、奈落の底に通ふかと疑はる。

あやしくも奇しきは浪の力かなてこや潜戸の神の岩窟。

洞門すべて三個あり。古傳に云ふ、佐太大神、この岩窟にて生れたもふ時、御母、支佐加比姫命、暗き岩窟なりと宣ひて、金弓もて射たまへば、明りさして、輝げるが故、この地をカカ（加賀）といふと。眞島、黑島、桂島等の小島、灣口を擁し、青松波に映じて、風光頗る佳なり。桂島は、尼子勝久が、新山より遁れ來りし處。尼子氏が出雲を踏める最後の地なれば、憑弔うたた感慨の情に堪へざらしむ。灣内は、即ち加賀港にして、水ふかく碇泊に適す。既にして奪潜戸に至る。これまた崖岸の一大窟にして、窟内暗憺たり。岩角をよぢて、窟内に入れば、小石累々、俗に賽河原といふ。試に、その石燈籠をこぼち、翌朝、再び探檢すれば、一夜の中に、燈籠はもとの如く、石上嬰兒の足跡を印すとかや。

（明治三十六年八月十四日稿）

船通山

荷馬の嘶に夢を破られて、雨戸を押せば、一天暗憺として星なく、山風庭樹を折り、雲脚矢よりも早し。前夜備ひおきし導者、天候を危みてか、六時に至りて漸く來る。時に、陰雲未だとけず、白雲溪山をとざし、風伯雨師、互に鎬を削りて、勝敗未だ決せず。余等、最終の勝利を雨師に歸し、雨具用の吳座を求めて、伯州阿毘縁の宿を出發す。さすがは、中國山系の峽間、嵐氣肌をおそひ、雲霧袖をうるほして奇寒骨に徹す。前面高く群山を拔きて雲に入れるは、即ち、船通山なり。

ゆくこと半里餘、雲伯の國境をこえ、溪間の小徑をたどり、岩淵の鑛泉を右に見て、溪流に沿ひ、牧場を横切り、桔梗、女郎花、早乙女卯木なぞ生ひ茂れる間をくぐりて、山麓を廻

ること一里、右船通山と記せる石標の下に達す。溪に沿うて上りゆけば、雜草矮樹繁茂して、徑漸く絶えんとす。六萬石の沖積層を漉既する簸の川も、この邊は僅に潺湲たり溪流にすぎず。草村をくぐり、樹枝をふみわけて上りゆく。濛霧雨とくだりて、衣袂ことごとく霑ひ、雜木葱々として、天日ために暗く、陰欝いふばかりなし。導者とばしば途を失して荆棘に陷り、辛うじて、先に登攀せしあとをたどりてのぼる。

六合目あたりの溪間に、いはゆる鳥上の瀑布あり。これ、簸の川の水源なり。一條の水脈、絲の如く巖皺を迸りて、高さ三丈、岩床の崩壞せしにや、今は瀑壺もなく、瀑布といふ名も惜しきばかりなり。九合目あたりよりは、絶えて樹木なく、熊笹生ひ茂りて、薊女郎花、桔梗、撫子などの野花咲き亂れ、天風おろひ來りて、しばしば、帽を奪をはんとす。十時。山巓に達す。

群山脚下にねちて、ひとり、大山の高峯、雲外に屹立して、中國の覇をほしいままにす。船上山は、ろの左に、大倉山はろの山に峙ち、ろの前に大林山あり。中國山系の連山遠く相連りて、西方はるかに半翠寰をあらはせるは、三瓶山にやあらん。忽にして、天風一陣、雲霧を驅つて、山巓をとざせば、乾坤濛々咫尺を辨せず。既にして、凝雲の一角破れて、碧瑠璃の青空をあらはすや、金線迸射して、直視すべからず。一晴一陣、倏忽、變幻、方物すべからず。

芝生に踞して、行厨をひらけば、雲氣漸く散じて、北方島根半島の連山は、淡墨もて描ける黛の如く、中海、宍道湖は盆池をたたへ、近く簸の川上の谿谷を瞰下すれば、人家さながらマッチ箱の如し。

想ひ起す、三千年の昔、大海澎湃天を磨する北海の荒浪を蹴破して、日韓聯合をはかりし素尊の宏圖。さては、八峽八谷にはびこりし妖蛇を斬つて寶劍を得、明眸皓齒、長髮地にひける稲田媛を娶りて、國土開闢の基を立てし素尊の偉績。ああ、勇悍なる尊の血統をうけ、簸の川の流に浴するもの、誰か無限の感なからんや。山は語らず、水物いはず、ただ、天風の颯々として衣を掠むるのみ。

有名なる栂の大樹は、絶巓より一町ばかり南に下れる笹村のうちにあり。周圍三四尺、高さ二三間、蟠屈數丈に及ぶ。大枝小枝、毎に支枝をうなふ。これ、神木の靈驗によりて腰

痛を患へざるがためなりといふ。中國山系の第一峯、すでにこの迷信あり。古雲州の地、迷信を以て名ある故なきにあらず。

正午、下山の途につく。衣をかかげ、一蹴して下れば、一時間にして石標の下に達す。ここにて小憩、導者をかへして、竹崎に出づ。顧みれば、船通山の峯頭雲を帶びて、依々として別を惜むに似たり。

（明治三十八年八月二十日稿）

鬼の舌振

下横田の宿を立ち出でしは、旭日山嶺を離れんとす頃なりき。昨は船通山の絶嶺に、素尊の雄圖を追懐し、今、また、舌振の奇勝を探らんとす。このあたり、いはゆる簸の川上にして、馬木川の横田川に會せんとして、溪流一巒山の巖峡をつんざき、斷崖十丈、奇岩怪石、磊々として峙立す、所謂舌振なり。この地、溪流を遡るに奇にして、下るに凡なりとされど、村人ろの奇景を知るもの少く、旅亭の主人、しまりに、下高尾より溪流を下るの順路なるを說くを以て、道を下高尾にとる。ゆくこと二里にして、馬木川岸に達す。導者を傭ひて、馬木川の右岸を下る。兩山相迫り、崖岸漸く高く、岩石漸く奇に舌振の奇勝はこれより始まらんとす。ズボン下、脚袢足袋を脫じ、辨當とともに一束して、導者に託し裾を高く括り、スデッキを携へ、輕裝して導者の後に從ふ。

大巖小巖溪中に横はりて、溪石相鬪ふの間、膝を沒する急端をわたれば、兵庫岩と稱する巨巖あり。巖頭に立ちて見下せば、碧潭藍を湛へて、蛟龍のひろむかと疑はる。岩角をふみ、劍尖をわたり、急湍を徒涉して、漸く下れば、巖々相迫るの間、一條の水脈、懸崖を奔馳して、鏗鞳澎湃百雷のとどろくが如く、泡沫四散して、銀泥をちらす。仰ぎ見れば、巨巖溪を壓して、路ここに窮まる。導者の手を假りて、岩腹をよづるに、岩面滑にして、動もすれば足を失せんとす。直徑尺餘の岩穴を潛れば、碧瑠璃の深潭を前に控へて、路また絶ゆ。ここは泅渡と稱し、溪中第一の難關なり。導者まづ衣を脫して、潭中に躍り入り岩角にとりつきて渡るべきを示す。その間、僅に三間にすぎざれども、深さ數仞、徒涉すべからず。悉く、衣を脫し、頭上に結束して泳ぎ渡るなり。

溪流を徒涉すること數回、疊岩に上る。また千丈岩といふ。長さ二十余歩、幅十余歩、花崗石の一大巖にして、上面平坦、上に百人を坐せしむべし。高く群岩を拔きて、觀望最も佳

なり。兩岸の絶壁高さ數十丈、青蘚紫苔岩面を封じ、老樹樓桴として、溪をおほひ、溪流岩を嚙んで、舌を出すが如し。

倒木を利用して足がかりとなし、岩腹を下り、股をせむる急流をわたり、岩角をよぢりつつ、下流に下れば、路また窮す。ここを飛渡といふ。兩岩の距離四尺許、岩面平滑、一たび足を失せんか深さ丈に餘れる潭中に陷らざるべからず。ろの下に蝙蝠岩あり、兩巖衝突して、ろの間、少許の空隙を生ずる處を後進に這ひ下るなり。しかも、隙隙小なれば、肥大漢はほとんど通過すべからず。ここを潛れば、やや、潤き洞窟に出づ。十數人を容るるに足り、蝙蝠常に飛翔するを以てこの名ありといふ。これより、また岩窟をくぐる、直下數丈、窟内に蟠屈せる藤蔓によりて、辛うじて下るを得べし。この邊に至りて、徒渉の途、遂に絶え、兩岸の懸崖、また中斷して、溪中の奇勝、兩斷せられんとす。余はこれより上流を上溪と名け、下流を下溪と名けんとす。大町桂月氏の跋渉せられしは、余がいはゆる下溪なりしが如し。

崖岸つくる處、態笹生ひ茂れる中をふみわけて下る。仰げば、左岸數十丈、一大巨巖の屹立するあり。ろの上に酒瓶狀の巖塊をいただく、これを酒瓶巖といふ。荆蕀を排して上りゆけば、ろの緣邊を一周すべしといへど、登攀せざりき。これより以下、磊々たる巖塊溪を埋め、全溪の本、僅にろの隙を迂曲して落下するのみ。鮎の如き魚族すら、これより上流に溯るあたはず。これを魚切と名づく。

下つて腰伸岩に上る。ろの傍に砲彈岩あり。前面は、斷崖絶壁、屏風を列したるが如く、高さ十數丈、石皺蒼古、鮮苔壁を封じて、老松瘦樹、ろの間に點綴し、溪風一陣、林樹を拂へば、落葉片々、さながら晩秋の如し。これを天狗岩とす。下溪第一の絶景なり。溪中は水石相軋りて、激雷噴雪、或は瀑布となり、或は瑠璃盤上に玉を碎き、水聲蟬聲喧聒囂騷、人語を解せず。

桂月氏のいはゆる飛石は、この下流にあり。盛夏水少く、少々の危險をおぼえざりき、これより、下流は景漸く凡となる。上下兩溪、數十町の間、鬼神の天斧に成れる絶景、水石苔樹相待ちて、生動蒼潤の妙を極め、魂飛び、魄ゆきて、身は塵世のものにあらず。實に雲南第一の奇勝に耻ぢずといふべし。

既にして、溪流を辭し、左岸より、草莽を排して、新設の三成街道に出づれば、炎熱やくが如く、頓に空腹をおぼゆ。時辰正午をすぐること三十分。（明治三十七年八月廿一日）

霧の鰐山

夜來の雨わづかにやみて、潑墨を流したる晩秋の天、晴雨未だトすべからず。約をふんで、閑雲氏の邸を訪へば、氏はまさに旅裝の準備中なり。やがて、布川氏來り、香雨氏に途に會し、一行四人、鰐山探勝の途に上る。塵も動かぬ碧雲湖上、朝霧ふかく鎖して、夢より淡き佐比賣の山は、わづかに嶺頭をあらはし、薪つみたる船、二艘また一艘、霧より出でて霧に消えゆく。

小境、平田を經て、途を西北にとりてゆく。このあたりいはゆる、多久の打絕にて、一帶の水田、溪間を埋め、稻架に集れる小雀、刈田をあさる烏の群、里川の水やせて、兩岸の蘆葉、ひとり秋をはしいままにす。

川下浦につきしは、午後三時。こゝは、日本海岸の一漁村、十六島岬、うの東に斗出して、一灣を抱く。磯馴松は、韓國かけて吹きよする潮風にもまれて、諧々の聲を奏づ。

溪流に沿ひて、爪先あがりの小徑を辿り入れば、鰐ひよいよ迫りて、人家兩三、竹林紅葉の間に隱見し、炭燒く烟、林樹を縫ひて、低く長くたなびく。

般若溪をすぎて、鰐山の境域に入れば、老樹蓊鬱として天をおほひ、古杉道を挾んで蔭なほ暗く、崖下十丈、碧潭藍を流し、落ちては白練をかけ、激しては瑠璃盤上に玉を碎く、千古の青苔に封ぜられたる石橋、羅漢橋をわたり、巖頭高く睥睨せる不動明王の銅像には、心肝を寒からしめ、大慈大悲の好相を備へて、慈眼溢るる觀世音に對しては、渦仰の念、今更に禁じがたく、溪風颯として衣を拂へば、冷露襟を掠めて、清寒凡骨を鍼す。

仁王門を入れば、楓葉霜を帶びて燃ゆるが如く、落紅滿地、古錦襴をしきたるが如し。一橋をわたり、數百級の石階を上れば、朱塗の殿宇、巍然として聳ゆ。これを根本堂とす。菊の紋打つたる鰐淵寺の掲額は、天皇管領一品公澄親王の染筆に成り、三百年の古建築なり。寺傳によれば、本堂の創設は、遠く推古の朝にありて、不斷の法燈、今に滅せずといふ。

庭隅の銀杏樹、まさに黃葉して、滿庭黃氈をしき、ことさらに拂はざる寺僧の雅懷も奧ゆ

かしく、溪流を隔てて、前面、浮浪山を望めば、老松千古のおしかげをとゞめて、怪幹骨をあらはし、霜葉點々深紅の色を殘して、古雅掬すべし。はるかに響く丁々たる斧の音は、仙人のうれに似て、頭上高く囀る禽聲は、伽陵頻迦の聲かと疑はれ、暮雲低く滿山を壓して、幽寂の氣、人をおそふ。時すでに五時、寺僧の厚意によりて、松本坊に一宿す。同坊の長尾氏は、當山出身なる村田寂順師の推選によりて、この程、京都より來山せりとて、火桶をかこみて茗をすすりつつ、しきりに雲國の勝景を説く。たまたま、哀猿一聲また一聲。起つて戸を開けば、一天暗憺、前山模糊として、巨人の陰影の如く、溪流淙々として岩をかみ、寒雨檐端を迸りて、溪山深き處、かすかに老梟の聲をきく。寂寞たる空山、奇寒肌に徹し、夜氣衣をおそうて、久しく堪ふべからず。詩を談じ、歌を話し恭を圍み、快談わくが如く、刻のうつるを知らず。

潺湲たる溪流に夢を破られ、口漱ぐべく前流におり立つ。清湍鏡の如く、楓葉片々風なきにおちて、友禪染を晒しれるが如く、苔滑なる岩頭をたどりて、潭水を一掬すれば、清冽指をおとさんとす。

仰ぎ見れば、滿溪の宿霧、未だはれず、うす絹に似たる烟霧、天邊よりおちて、忽にして、溪山の巓を鎖せば、淡粧一抹、名工の墨繪かと疑はれ、やがて、吹きおろす天風に驅られて、梢頭をはなるるや、金線霧中より放射して、燃ゆるが如き紅葉、滴るが如き緑樹、山色いよいよ鮮に、さながら、極彩色の屏風を列ねたるが如く、山光林樹生動して、變幻出沒得て把捉すべからず。

松本坊は、鰐山十二房の本坊にして、藩主の御成ありし處。庭園水石のただずまひ尋常ならず。溪山烟霧の大景、居ながらにして掬す得べし。

朝餐を了へて、是心院にいたり、寶物を拜觀す。この地、古昔、鰐山四十二坊と稱して、別所、唐川の諸部落を併せ、數多の衆徒を養ひて、武力を國中に振ひし處。北條時宗が、元冠調伏のため、日本七大寺に納めたる願文、後醍醐天皇隱岐遷幸中の御綸旨をはじめ、足利、毛利、德川氏、累代の古文書數百通を藏し、ことに名利長年の眞蹟は、天下の絶品

として、天覽を辱うせり。鎌倉以來、諸豪族の消息をはじめ、雲國の近古史を研究せんと欲するものは、すべからく、當山の古文書を精査せざるべからず。雲國中、古文書を藏する社寺多かれど、當山の右に出づるもののあらざるべし。ろの他、佛像、佛書の國寶たるべきもの多し。正午、同院を辭し、浮浪瀧に至る。

浮浪瀧は、浮浪山の谿間にあり。溪流をわたり天を摩する老杉の間を縫うて、羊腸たる徑路をたどりゆくこと數町、怪禽頭上に叫び、泉聲脚下にひびく。まさに崩れんとする巖角をめぐれば、白練十丈、眼前にかかれり。水勢はなはだ大なりといふを得ざれども、瀟灑のあたり、一面青苔におはれ、一たび足を失すれば、身は現世のものにあらず。老樹鬱々として、天をおほひ、烟霧ふかく鎖して、衣袂ために霑ふ。瀧壺の上數十尺、飛瀑の裏面に小祠あり。ろの側に、龍眼水あり。清冽眼病に効ありといふ。時まさに二時。六里の歸程長からずとせず、即ち、再遊を期して歸途につく。（明治三十六年十一月廿三日稿）

上代の神都

稻佐灣頭のピラミッドたる彌山をかなたに見て、われは今上つ代の神都に入らんとす。籍つづら、くるやくるやに、河舟のもうろもそろに引き寄せたまひし、八穗米支豆支の御埼玉と碎け、雪と散る、北海萬壘の洪波をけやぶりて、日韓聯合の宏謨を立てたまひし八束水臣津野命。ろの御功績を追想しつつ、今踏む處の一草一石、ろのかみの海底の一部かとおもへば、源とはき鳥髮の山、ならびてかかる雌雄の瀑、その白絲のむすばれて、とはにつきせぬ簸の川の、奇しきあやしき水の力、幾千百年をや經にけん、青波みなぎる十萬石の廣野原、國造らしし大國主命の功績はいはずもがなれ、溫厚守成の事代主命のおもかげも忍ばれつ。武雷神が韓國かけて吹きよする沙風に、蓬中たる虎髯をなぶらせつ、十握の劍逆立てて、國讓の議を開きましけん五十田狹小汀の地、今たづぬるによしなしといへども、精悍勇猛、いたく、乃祖素盞嗚尊の血統をうけて、苟くも臥榻の下、他人の鼾聲をゆるさざりし快男兒建御名方命が、燃ゆるが如き滿腔の不平禁ずる能はず、千引の石を手末に提げて、武雷神に抗したる意氣に至りては、宮の出雲男子の樂にもがなと、ろぞろに懷古の情に耽りつつ、脚はいつしか杵築町に入りぬ。眞光寺橋をわたれば、西側の旅舍、和洋折衷の一種異樣なる建築に、宿引の婦女等が聲をきき流して、馬場、大鳥居をすぎ、だらだら

坂を下りぬ。千年の老松道をはさんで、隧道をなす處、八雲山は當面に屹立し、老杉古松蔚然として太古のおもかげを存ずる處、これを出雲大社の神域とす。

長州侯の寄進にかかれりといふ青銅の大鳥居を入り、真砂しきつめたる廣庭を横切りて、御手洗のほとりに至れば、清泉淙々として迸る處、うす紫の被衣きて赤裳つけたる神媛は天使の天降りてわれ等を導くが如く、八足門の御扉に、ここら敬ひぬかづけば、拍手の音ただちに響きて、神威さながらゐますが如し。

仰ぎ見れば、八丈の宮殿蒼穹を磨して、底つ磐根に宮柱太知り、高天原に榮木高知りて、宏壮なる規模は、粛然として、崇敬の念を起さしめ、御扉の上なる葡萄に栗鼠の浮彫に、甚五郎が鑿の香を慕ひ、觀祭樓なる稲田姫の塑像に對しては、明眸皓齒、長髪地にひきて、温和貞淑の相にみちたる國つ少女の面影をしのばしむ。

翠色したたる八雲山、鶴山、龜山の三山、背面をおほひて、素戔嗚の社の鉾杉は千年のおもかげを存し、天穂日命の後裔たる千家北島の兩國造館は、社の左右に連り、暮色鬱然として神域をとむれば、嘲哳たる神樂の響、冠着けたる禰宜のおもざし、赤裳ひきたる巫女の姿、實に上つ代の神都の夕ぐれ、御殿の奥ふかく、ほのあかさ御燈火、われは、恍然として太古の領に入りぬ。

月山の古城址

ゆきゆきて廣瀬に宿りぬ。富田川を隔てて月山の古城址に對する處、客館孤燈の下、ひとり英雄の偉績を追想すれば、萬感交々胸をついていたる。起つて戸を開けば、月なく星暗く、一天暗憺として西風の庭樹を掠む。

翌朝、空は曇りたれど、幸に雨ともならず。習堂山口氏と相携へて富田川堤に上れば、月山の蒼翠蔚然として前面に横はれり。富田の地、三方山を以て圍まれ、富田川その中央を貫き、北東の一方僅に開けて中海の濱に連る。地域狹隘、ことに、月山は直立數百尺、三方の連山よりみな瞰下せらる。されど谿中に孤立して、山容削るが如く、前に富田川を控へて密樹滿山をおほひ、一夫途に當れば萬夫も超えがたき險要の地。げにや、山陰山陽十ヶ川の大守として、覇を中國に爭ひし尼子氏の城地たりし、當年の雄風を想見するに足る。

登路三條あり。北方新宮谷方面よりするを菅谷口といひ、南方鹽谷方面よりするを鹽谷口

といひ、廣瀬町の背面よりするを御子守口といふ。山口氏は廣瀬の人、月山城につきて深く調査する所あり。堤上より北方一帶の連山を指して、京羅不山は彼方、勝山は此方、西方に聳ゆるは三笠山、馬返峠、東南に屹立するは、大逵山、獅松山など、一々指摘して詳悉を極む。富田川は、今、流域を變じて月山の麓を洗ひ、昔時の市街地は川床となり、現時の廣瀬町は古の流域にして、當年の面影を存せずといへども、品川大膳が、自ら城木狼之助と改名して、山中鹿之助と格闘を挑みし川中の洲は、このあたりなりけんなど語りつつ、危げなる假橋を渡り、成安寺を右に見て、菅谷川に沿ひて、新宮谷に入る。

新宮谷は、經久の次子國久が邸宅を構へし處。經久の長子政久、阿用城に戰死して嫡孫晴久なほ幼冲なりしかば、國久、叔父としてこれを輔佐し、精悍勇猛、尼子氏の別働隊として新宮黨の威名は、遠く山陽を風靡し、大内、毛利の權をして心膽を寒からしめき。元就しばしば、出雲を侵して志を得ず、百方離間策を行ふ。晴久暗庸遂に元就が詭計に陷り、國久一族の登城を菅谷門に要擊してこれを殺し、自ら羽交を殺ぐ。これより尼子氏漸く振はず。菅谷川の上流は二派に分れ、谿また二つに分る。左谿に入れば「尼子家新宮黨之靈社」と題せる三尺の自然石の草に埋るるあり。その側より草逕を辿れば、小丘の麓、荒廢見るに忍びざる小祠あり。大夫神社といふ。これ新宮黨の靈を祀れる處なりといふ。國久の邸址はこのあたりなりけん、故墟蕭條英魂黄土に委して、また尋ぬべからず。あゝ三千の情鋭、雲國男兒の花と呼ばれし新宮黨の末路、感慨胸に迫りて、低回去るに忍びず。懐古の涙に咽びつつ、もと來し道に引きかへし、成安寺畔より月山に向ふ。このあたり、尼子屋敷と稱し、尼子氏の邸宅のありし處にして、月山城の大手口なり。

先年、瀬川博士、史料を蒐集せんとて、この地に遊び、滞留數日、山口氏より、幸盛の遺物の吉川子爵家に秘藏せらるるをさくや、歸途、岩國なる同子爵家を訪ひ、甲冑ろの他の遺物を一見して、奇代の逸品たるに驚き、冑の八幡座の裏面に附著せる古錦襴の守袋を探りて、摩利支天の守札を得、ふかく古名將のおもかげを忍び、自殺數日前の日附を有する幸盛が自筆の文書を得て、ろの筆力の遒健なるに感じ、ろの寫を同氏より送り來りしことなど、史癖あるわれには感興わくが如く、草逕を右に辿りて御子守口の方面に出づ。御子

守神社と稱する小社あり。その下は即ち御子守口にして、睡虎山と題せる山門あり。石階を上れば老樹陰森天をおほふ。仁王門を入れば、即ち岩倉寺なり。その後方、常念佛の庭内に宏大なる五輪塔あり。高さ二丈、廻らすに石柵を以てし、築くに石垣を以てす。堀尾吉晴の墓なりといへど確ならず。荆棘を拓き、小徑をよぢ上れば、稍平坦なる處に出づ。この邊藩士の邸址にして、千疊敷、大鼓塚等の名を存し、桑畑、蕎麥畑、大豆畑相連りて柿のもみぢ葉ひとり秋を恋にす。

山畑をゆき盡せば、蓊鬱たる月山は眼前に塞がり、城に礎たりし石垣は、青苔蒙羅に封せられて、昔時の面影を止め、菅谷口の本道はここに通ずるなり。杉樹茂れる中を上りゆけば、山骨削るが如く、坂路險峻、前者の足を戴さて登る。この邊を七曲と稱す。登ること數町、當時の瓦片を叢中に求むべし。

絶巓は細長き平地にして、南北僅に二十間、東西三町ばかり。薄尾花兩面をおほひ、櫻楓その間に點綴するのみ。こゝ月山城の遺址にして、二區に分れ、中央に二ケの古井を存す。三株の老松假寐として枝を垂れ、謖々たる松風昔を語る處、節に留めて双眸を放てば、富田川は蜿蜒として長蛇の如く北流し、中海は盆池の如く、夜見濱の長洲その東を劃り、十神山の翠影はその右方に三角形をなし、島根半島の連山は模糊として墨黛を描き、大内、毛利の陣地たりし京羅木、勝山の諸山は、近く眼前に横はりて、千軍萬馬叱咤紛拏の當時を追想せしむ。ああ、山陰の偉丈夫經久、英魂一たび去つて、雲國の士氣遂に振はず。重圍七年、山陽男兒のために故山の地を蹂躪せられて、藝州長田の里に幽囚の身となりし義久の胸中、誰か涙なからんや。

ああ、追懷ふかき月山の古城址、雄圖は廢れて山河あり、邸址は開拓せられて畑となり、城墟は空しく蔓草に埋れて、いたづらに悲風の咽ぶるのみ。三代の碌業は地に委して、出雲男兒が偉蹟は、まさに湮滅に歸せんとす。尼子氏の遺澤を蒙れる度瀬人士、何ぞ奮つて月山峯頭に一大紀念碑を建設せざる。雲國人士、何ぞ奮つてその舉を翼贊せざる。神代の古郡、杵築の地は、天日隅宮儼存して、大國主命の威名とともに、出雲民族の偉績は、永久に光彩を止め、第三の郡城たりし松江の地は、山陰第一の都會として、巍然たる千鳥城は、堀尾氏の功績を千歳に傳ふるに足る。而して、雲國第二の城市たりし富田の地、何

ゐしかく蕭條たる。一祠の以て尼子氏の靈を慰するなく、一碑の功を千歳に傳ふるなく、故墟落日、悲風晩靄をとざし、斷礎荒垣蔓草に埋るる處、颯々たる松風、陰雨に和して、半夜幽鬼の啾々たるを聞くのみ。

頂上さはまる處に、勝日高守社といふ小社あり。式内の古社にして、大國主命の幸魂を祀れり。

これより急坂を辿りて、鹽谷に下り、山麓に沿ひてゆくこと數町、人家の傍なる山腹に、一株の古松枝を垂るる處、一基の五輪塔あり。高さ五尺八、塔身僅に尺餘。四面に梵字様のものあれど、崩壊して讀むべからず。これを月山城主尼子經久の墓とす。塋域廣さ數歩、柵の圍むなく、蔓草の延び、落葉の埋むるに任す、ああこの地、千古の英雄が永眠せる處なるかをおもへば感慨きはまりていふべき言葉を知らず。

やかて、富田川を渡り、景清矢立松の遺址を一見して、石階を上れば、老杉蔚々として隧道をなす。ここを過ぐれば、樓門あり、壯嚴なる社殿あり、これを富田八幡宮といふ。近郷十三村の宗社として崇敬せし處、今、郷社に列せらる。もと、月山頂にありしが、惡七兵衛景清月山に城かんとし、神廟に祈り、暗中矢を射て、その矢の達する處、即ち神意のある處なりとて、この地に移遷せりと傳ふ。世々月山城主の崇敬せし所にして、境内頗る幽邃なり。

かくて、月山附近の探究を了へ、山口氏と別れて旅舍にかへりしは、午後一時半なりき。

（明治三十八年十月廿六日）

竹島渡航日記

（抄錄）

夜一夜、日本海の海波に搖られつゝ、いつしか、華胥の國に遊びぬ。「竹島見ゆ、竹島見ゆ」との聲に驚かされて、甲板に上りし時は、太陽既に東天に昇りて、竹島の巨岩は近く眼前に横はれり。忽ち見る、三頭の鯱（海豚屬）舷頭を掠めて猛進し、背部をあらはすこと數回、無數の海鵰亂飛し、數千の海鵰岩角洞窟に群集して、叫聲さながら怪物の悲鳴するが如く、喧々囂々數十町の外に達す。

突兀たる兩巖、峨々として海面を抜くこと數百尺、斷崖峭壁屏風を列するが如く、塞潮岩脚を浸蝕して處々に洞門を開き、幾十の岩礁ろの附近に羅列す。水深くして數町の附近さ

ぞしかく蕭條たる。一祠の以て尼子氏の靈を慰するなく、一碑の功を千歳に傳ふるなく、故墟落日、悲風晩靄をとざし、斷礎荒垣蔓草に埋るる處、颯々たる松風、陰雨に和して、半夜幽鬼の啾々たるを聞くのみ。

頂上きはまる處に、勝日高守社といふ小社あり。式内の古社にして、大國主命の幸魂を祀れり。

これより急坂を辿りて、鹽谷に下り、山麓に沿ひてゆくこと數町、人家の傍なる山腹に、一株の古松枝を垂るる處、一基の五輪塔あり。高さ五尺、塔身僅に尺餘。四面に梵字様のものあれど、崩壊して讀むべからず。これを月山城主尼子經久の墓とす。塋域廣さ數歩、柵の圍むなく、蔓草の延び、落葉の埋むるに任す、あゝこの地、千古の英雄が永眠せる處なるかをおもへば感懷きはまりていふべき言葉を知らず。

やかて、富田川を渡り、景清矢立松の遺址を一見して、石階を上れば、老杉蔚々として墜道をなす。ここを過ぐれば、樓門あり、壯嚴なる社殿あり、これを富田八幡宮といふ。近郷十三村の宗社として崇敬せし處、今、郷社に列せらる。もと、月山頂にありしが、惡七兵衛景清月山に城かんとし、神廟に祈り、暗中矢を射て、その矢の達する處、即ち神意のある處なりとて、この地に移遷せりと傳ふ。世々月山城主の崇敬せし所にして、境内頗る幽靜なり。

かくて、月山附近の探究を了へ、山口氏と別れて旅舍にかへりしは、午後一時半なりき。

（明治三十八年十月廿六日）

竹島渡航日記

（抄錄）

夜一夜、日本海の海波に搖られつつ、いつしか、華背の國に遊びぬ。「竹島見ゆ、竹島見ゆ」との聲に驚かされて、甲板に上りし時は、太陽既に東天に昇りて、竹島の巨岩は近く眼前に横はれり。忽ち見る、三頭の鯱（海豚屬）舷頭を掠めて猛進し、背部をあらはすこと數回、無數の海鵜亂飛し、數千の海鵰岩角洞窟に群集して、叫聲さながら怪物の悲鳴するが如く、喧々囂々數十町の外に達す。

突兀たる兩巖、峨々として海面を抜くこと數百尺、斷崖峭壁屏風を列するが如く、塞潮岩脚を浸蝕して處々に洞門を開き、幾十の岩礁ありの附近に羅列す。水深くして數町の附近さ

で船を寄するを得れど、海底不良にして投錨すべからず。この日、海上靜穩なりしかば、直に端艇をおろして、一行西嶼に上陸す。

春曉千金の夢を貪れる海鱸の群は、一行の來航に驚き、轉輾岩角よりれちて水中に沒し、忽にして數百の頭顱を波上にあらはし來る。漁夫は洞門に刺網をはりて、睜く中に數頭を獲たり。ああ、かれ等が日本海中の樂園として、幾百年間占有せしこの巨岩も、文明の潮流は滔々としてこの樂土を奪ひ、銃聲一發岩角に響くや、淋漓たる鮮血海面を染めて、死屍は波間に横はる。しかも感覺、遲鈍なるかれ等の群は、この慘狀を知らざるものの如く、數十また數百、頭部を露出して悠遊するさま、むしろ憐むに堪へたり。

西嶼の調査を了へて東嶼に渡る。岩上幾百の海驢眠未ださめず。漁夫櫂をとり、滿身の力をこめて一打すれば、六尺の海鱸血に染みて褪ために折る。而して、他の海驢は依然として隋眠を貪るものの如し。兩岩相對する處、稍平なる砂礫濱あり。ろの邊に竹島漁獵會社の假小屋二棟あり。ろれより、岩角を辿り、楷子にすがり、絶壁を攀ぢ、劍背を亘りて上る、危險いふべからず。衆多く半腹より引きかへし、絶巔に達せしは八名にすぎず。頂上に立ちて眺望すれば、水天彷彿際涯を知らず。回顧すれば、昨年五月二十八日、わが聯合艦隊は、露國艦隊を本島の南方約十八浬の海上に要擊して、敵の司令官ネ將軍をして、艦隊をあげて降伏せしめし處。砲聲轟々天地を動かし、硝烟爆烟海面をこめて、洶若躍り、蛟龍怒り、狂瀾萬壘雪山を捲き、大濤澎湃鯨鯢を呑むの間、泰然自若たる東郷大將の面影も想見せられて、西方はるかに淡靄をひけるは鬱陵島にやあらん。露國艦隊司令長官魯提督を生擒せしは彼方にやなど、浩然たる大觀に接して、天空海闊、身神既に塵寰のものにあらず。各紀念の松樹を栽植して下る。一歩を誤れば、千仞の巖窟に陷りて、粉碎免るべからず。戰々兢々、冷汗背をぬらすのみ。

一同視察を了へて、本船にかへり、竹島を一周す。海波漸く高く、海上不穩の兆あり。即ち鬱陵島に避難することに決し、同島に向つて航行す。時に午後二時三十分。

（明治三十九年三月廿七日）

島根縣名勝誌（終）

明治三十九年九月廿日印刷
明治三十九年九月廿二日發行

不許複製

著者　奥原福市　出雲國八束郡秋鹿村岡本九四八番地
發行者　有田傳助　松江市末次本町七二番地
印刷者　中村彌助　東京市京橋區日吉町十番地
印刷所　近藤商店　東京市京橋區日吉町十番地

定價金二十八錢
郵稅四錢

發賣元
大賣捌所　松江市京店　有田傳助
松江市　大戸書店○川岡書店○國山書店　今市　遠藤書店○直良書店
濱田　安達書店○古井書店　伯州米子　今井書店

橘泉堂廣告

藥品機械眼鏡染料
洋酒品食料品食器
寫眞用品附屬一式
香水香具齒磨石鹼
化粧品類印度藍人
造肥料度量衡器商

松江市京店大橋通
橘泉堂藥舗
山口卯兵衛

●有田書店發賣品目

△弊店ハ京阪各書店ノ新刊書籍ハ普ク取次販賣居候
△中等教育　學校教科用書
△各學校參考書及各種掛圖類
△小學校教科書
△和漢洋各種書籍及雜誌幷ニ繪ハカキ

樂器の部

○ブアイオリン幷ニ附屬品
○月琴○胡琴○携琴○提琴○横笛○銀笛○吹風琴
○ゲンカン○尺八

運動具

●ロンテニス用ラッケット各種御好ミ次第
其他附屬品　ゴム丸
●ベースボール用具
●啞鈴●球竿

學校用品

△水彩畫用紙　上等各種　△無地繪ハカキ用紙
△水彩畫用　舶來　和製繪具各種　其他學校用品一切

右多少ニ不拘御用命奉願上候

松江市京店　有田傳助

30
470

○内外書籍及諸雜誌取次大販賣

小店は各出版元と特約を結び誠實廉價を旨とし種類の如何を問はず雜誌に至る迄悉く取揃へ確實迅速を以て御注文に應じ可申候へは何卒多少に不拘御用命奉願候

奥附四

御注文規定

御注文品は可成著者書名出版書肆等御明示願上候
御注文の際は前金御送附被下度候
但し御便宜上代金引換小包郵便にても不苦候
御送金は可成銀行爲替又は郵便爲替にて願上候
但し御不便の地は郵便切手代用にても不苦候
御照會は往復端書又は返信料添御申越願上候

松江市京店　有田傳助

〒 振替貯金番號　第七壹九番
御送金の節は御申越次第振替貯金用紙送呈仕候

出雲國産
諸國名産
陶磁器商

松江市本町
出雲金藏本店
同　船舶部
同所
出雲貿易合資會社
諸品委托販賣
同韓國鎭南浦支店

阪鶴鐵道
連絡荷客扱所

松江市和田見海岸
松江港支店
廻漕部

松江市地球堂の營業課目

EUROPEAN FANCY GOODS,

CHIKIUDO & CO.

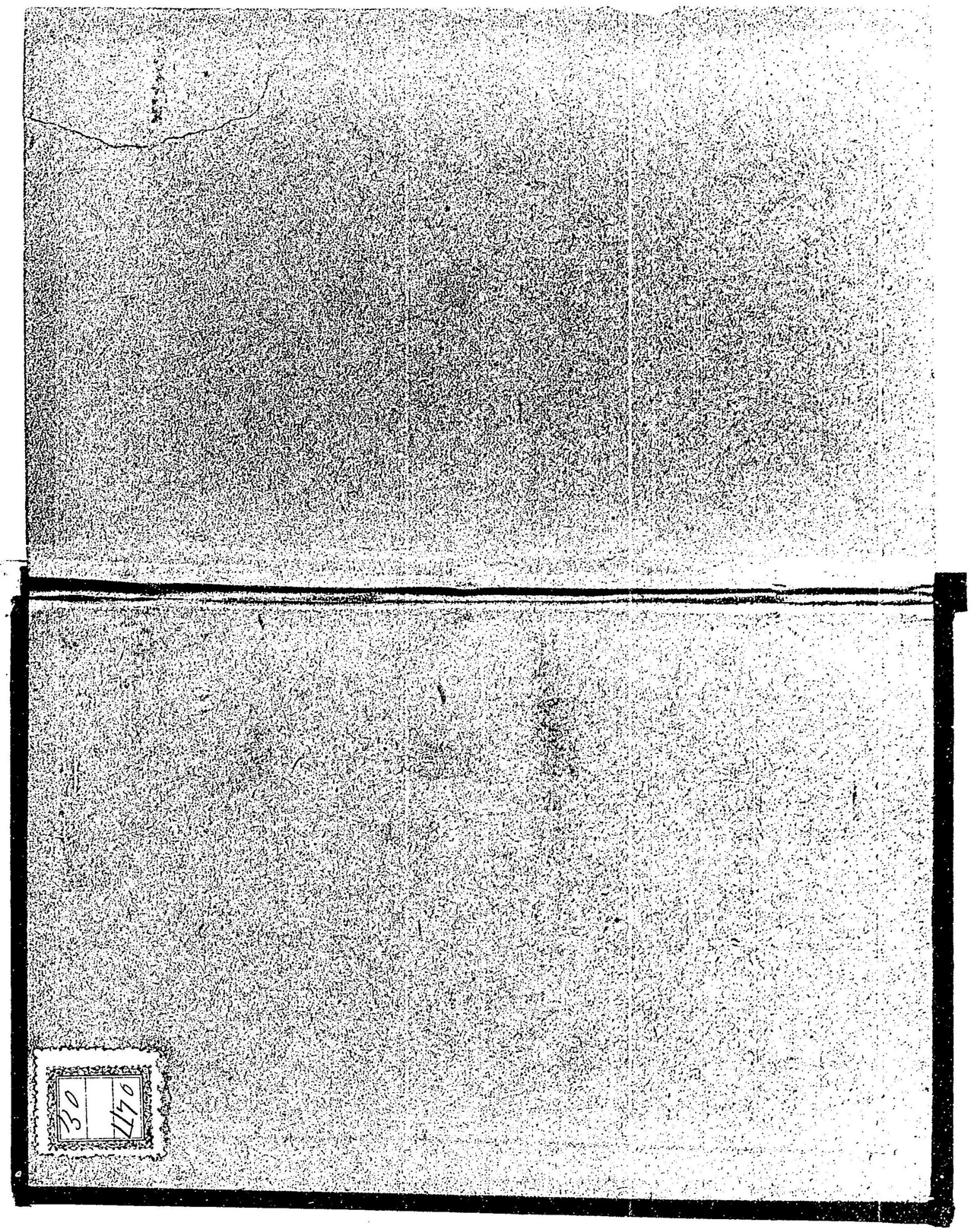
最新流行 歐米雜貨各種
紳士淑女御化粧品
絹毛織物莫大小類
海外旅行用具一式
西洋裝飾品幷に家具類
洋食料品幷に食器類
特許品及發明品色々
自轉車幷に附屬品一式

船來物ナレバ地球堂

御得意様に稟告

御入用品多少共御用命を乞ふ
誓て御滿足を捧げんことを期す

市内は御一報次第店員御伺可申上候
市外は引替小包郵便にて發送可仕候



30
470

025885−000−7

30−470

島根県名勝誌

奥原　碧雲／著

M39
ADC−3442